

## 介護に役立つ ほのぼの会話のすすめ

同じものを見ても  
違って見えることがある

何かを見ている時、実はあらかじめ知っていることと組み合わせで見えています。たとえば、目の前にりんごがあったとします。これがりんごだとわかること自体、目の前のりんご以上のものが見えていることを意味しています。

もし、生まれて初めてりんごというものを見た、または、記憶障害によりりんごのことを忘れてしまったとします。すると、りんごは赤くて丸いもの、つるつるしていて、中央がくぼんでいて、そこに短い軸のようなものがついているものに見えるでしょう。本当に何であるかわからない場合、食べられるかどうか、そもそも食べ物であるかどうかすらわからないでしょう。見ただけでわかることはとても限られているのです。見ておもしろいと思うたり、りんごだとわかったりする時点で、実は、食べたこと、おいしかったことを無意識に思い出しています。

りんごについて何か知っていることが同時に思い浮かぶこともあるでしょう。たとえば、甘くて瑞々しい、噛むとしゃきしゃきしている、八つ切りにして皮を一部切り取るとうさぎの形になって可愛い、アップルパイにして食べるのもおいしい、日本の産地は青森県である、といったことが挙げられます。

さらに、何か印象的な体験と結びついていることもあります。テーマを決めて写真を持ち寄り、話し手の写真を映し出し、時間と順序を決めて話し手と聞き手を明確にして会話する共想法プログラムで、りんごが話題になったことがあります（写真1）。

写真1 流し台のりんご



梅村さん(仮名)のりんごの思い出

昭和45〜46年頃、三畳一間、共同トイレ、共同流し台のボロアパートで貧しい下宿生活をしていた大学時代の出来事。私、貧しいながらも定期的に好きなりんご5〜6個を流し台にコロコロ転がして洗っていた。しかし、その流し台は大家がトイレ掃除に使ったモップを洗っていた場所だった。そのことを同じアパートの住人の女性（当時、幼稚園の教諭）に教えてもらい驚いた。その女性が現在の家内。

写真だけ見ると、何気ない、洗いたてのおいしそうなりんごに見えますが、お話を聞くと、いろいろな思い出がぎゅっしり詰まっていることがわかります。このお話を聞いた後に、普段通り流し台でりんごを洗うと、このお話を思わず思い出してしまいます。

最終回

# 相手から見える世界を ともに想い描く

前回は、「見る・聞く・話すを助ける環境を整える」と題し、見る、聞く、話すといった、会話に必要な基本的な機能に衰えがある方でも、会話に参加しやすいよう、机といすの配置を変えマイクを用いたり、柔軟体操と発声練習をしたり、一緒に撮影した写真を見ながら会話するなど、環境を整える工夫について紹介しました。最終回の今回は、ほのぼのの会話とは何か、ほのぼのの会話をどのように介護に役立てればよいか、お伝えします。

東京大学 人工物工学研究センター 准教授、  
NPO法人ほのぼの研究所 代表理事、  
科学技術振興機構 さきかけ研究者

●大武美保子